

## ● 新規購入図書紹介

図 書 名	著 者	出 版
<b>地 方 財 政</b>		
第四版 監査必携	全国町村監査委員協議会 (編著)	第一法規
<b>地 方 行 政</b>		
都市データパック 2020	東洋経済新報社	東洋経済新報社
<b>社 会 福 祉</b>		
よくわかる障害者福祉 第7版	小澤 温(編)	ミネルヴァ書房
<b>地 方 経 営</b>		
逆境をはねかえす広島型スポーツマネジメント学 地域とプロスポーツをとともに元気にするマネジメント戦略	藤本 倫史(著)	晃洋書房
<b>経 済</b>		
コロナ危機の経済学 提言と分析	小林慶一郎(編) 森川 正之(編)	日本経済新聞出版



### 夜空を見上げて



最近、日が暮れるのも早くなり、夜になると虫の音が聞こえ、秋を感じるようになってきました。秋と言えば、私の中ではお月見を思い浮かべます。我が家では定番の里芋とお団子を供え、萩とススキを飾り、月を見ながらお団子を食べるといのが恒例行事になっています。今回は、お月見について調べてみることにしました。

旧暦の8月15日に月をながめる風習は奈良時代の頃から始まったとされ、平安時代になると、名月の和歌などがたくさん詠まれました。そして、徐々に一般の人々にお月見として浸透し、収穫した作物やお団子やススキをお供えするようになりました。

ではここで、月にちなんだ和歌をいくつか紹介したいと思います。(古今和歌集より)

- ・月見ればちぢに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど 大江千里  
(月を見ていると、私の連想は際限なく展開して、なんとなく悲しくなる。私の体一つのためにある秋ではないのだが、思いはなんとたくさんあることだろう。)
- ・天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも 安倍仲磨  
(広々とした大空を遠くはるかに見晴らすと、今しも月が上ったところである。思えば若かった私が唐土に出発する前に、春日の三笠の山の端から上ったのも、今夜の月と同じようなものであった。)
- ・有明けのつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし 壬生忠岑  
(有明けの月が空に平然とかかっているように見えたあの朝は、あの人も私を平然と拒絶した時であった。その有明けの別れがあってからというもの、暁時ぐらい悲しいものが私にはなくなった。)

学生時代に習った和歌もいれてみました。とても懐かしく、解説を読んでいると言葉の奥深さに改めてしみじみしました。

さて、お月見をする十五夜は中秋の名月とも言われ、今年は10月1日がその日にあたります。過去5年間の和歌山市の天気を見てみると、中秋の名月の日が晴れていたのは3回ありました。今年はどうなるでしょうか。晴れてほしいですね。いつの時代も人をひきつける月に想いをせながら見上げてみようと思います。



※参考資料: 気象庁ホームページ、日本古典文学全集 古今和歌集(校注・訳 小沢正夫)  
国立天文台ホームページ、集英社版 大歳時記(2 句歌 秋冬新年)